

<b>新幹線プレス</b> 	2024年12月16日	No.691
	発行者	伊藤一也
	編集者	教宣部
JR東海労新幹線地本		

## 加盟単組を壊し追出す総連から決別！

### JR東海労臨大 新幹線地本代議員の発言を紹介します

昨年12月東海労は臨時大会を開催し、JS労とともに闘うことを決めました。JR総連、東海労、JS労の委員長三人が固く握手をしました。今年2月の定期委員会では、「ボタンの掛け違いがあれば話し合う事で解決できる」と提起し、JR総連山口委員長は、「本部から提起があれば検討する」とたえました。

しかし、いずれの確認も数日後には180度ひっくり返って、「JS労は認めない、三者の話し合いは必要ない」というJR総連見解がだされ、議論の道は閉ざされました。

日本労働運動をまっとうな方向に向けんがために闘い続けているJR総連が、このように変質してしまったことは信じられませんでした。ある組合員は、「いつからこのようなポンコツになったのか」と嘆いていました。

私は組合員から「JS労を組織拡大だというが、東海労が拡大したわけではない」と言われて、「東海労の拡大とは東海労の運動が拡大すること。それはJR総連の運動の拡大でもある」。それを否定しているのが今のJR総連だと答えました。

脱退者は「森下を支える。JR総連と共に」などと言っています。しかし、彼らはJR東海労の非難はしてきましたが、森下を支えて一体どのような運動をするのかはまったく伝わってきません。JR総連と共にと言いますが、東日本でのJR東海以上の攻撃に対しても、職場や第三者機関を活用して闘う方針は東労組本部もJR総連も全く掲げていません。

かつて東海労をつくり、30数年の闘いを育て継承し、今我々に託してきた先輩たちが、今その東海労を自らが壊そうとしている。

JR総連が否定しているJS労、その結成の意義は何か、職場で虐げられている労働者と共に闘うということだと改めて思います。

おかしい方向に行ってしまった総連を正そうと、総連と共にと一年間やってきましたが、今は共にできる組織ではないという事がはっきりしました。産別の中の単組を自らが壊し、追出そうとするなど前代未聞の行為であり、究極の組織破壊行為です。決別することは、必要な判断であると思います。私が話した多くの組合員もそう理解しています。JR東海労の新たな歴史を今、ここからつくりだそうではありませんか！新幹線地本はJR東海労運動を今後もしっかりと担っていきます。そしてJS労と共に東海労運動を拡大させるために今後も奮闘することを明らかにして発言にかえます。共に頑張りましょう！

【総連による組織破壊についての発言の要旨です】